

一月二二日

八時過起床。綿の様な雲が水平に広がって朝の光を微妙にコントロールしている。毎日新聞「生きる者の記録」が再開されるようだ。今日は大きく健の写真が掲載されている。このメモには書ける事と書けぬ事があるのだが、秋田の玉川温泉で健から「石山あの日記に俺の事書くなよ、俺には俺のプライベートがあるんだから。」と言われた事を思い出す。何しろ色んな事を思い出す。結局、健は自分の生死の境という究極のプライベートを公開してしまったのだから、あの言葉は宙吊りになってしまったなあ。

考えてみれば、私のこのメモだってゆるやかな、まことにゆるやかな死への記録でもあるのは確かな事で、人間は皆それを自覚するか、しないかの区別しか無いな、コレワ。次に自覚してどうなるの問いが生まれようが、要するにコレワ、どうせ死ぬのだからとあきらめるか、どうせ死ぬのだからと一日一刻を痛切に生きようとするかの二つの対処しかあり得ない。大方はこの二つの経をいったり来たりしているのだが、時に明快に分離して生きていく人間が居て、諦めるのも痛烈なものも少々度を超してしまっているのが確かに居る。あきらめ過ぎると痛烈なのは一緒でもある。それ故あきらめ切れぬ人というのが出現するのであろう。

北海道十勝スノーボードをオープンテックハウス#11にカウントしよう。考えてみればスノーボードは良く開放系技術の考えを表現しているから。烏山駅のプラットフォームで気付いた。若松

氏のインスタント・オフィス計画は二月中にプランをまとめる必要があるようだ。十五時過大学をでて世田谷へ。デューク・エリントン&ジョン・コルトレーンのセンチメンタル・ムードのメロディが耳にこびりついてはなれない。これはヤバイぜ。しかしポツカリ穴があいたな時間に。

一月二十三日

朝五時過眠れぬままに起きる。胸騒ぎというか、ささやかな啓示と言うのか、やるべき事がフツと開示されているような気がしている。2月3月と異常なスケジュールを組んだ。これ全部こなせたら倒れるなという位のものだ。本当に倒れちゃったら、それも仕方ない。それだけの人だったとあきらめよう。

聖徳寺の現場が始まった。色々苦労したし、これからも大変だろうがやるしかない。昨夜鈴木博之から言われた批評と理論小委員会の件は、大事な事だな。本当は機関紙を創り出す必要があるのだ。まとめの、ではなく、はじまりのシンポジウムを開催する必要もある。その主題が問題だろう。磯崎新によって連続シンポジウムは大阪万博大屋根岡本太郎まで辿り着いた。その先をやらなくてはいけない。若い頃にやった鈴木石山の連続時評のような形式で作品評が出来ないのか。雑木は相手にできぬけれど、今を作品を介して書けないか。でもなあ、書きたい建築がどれ程あるかな。十時学科会議室。十三時教室会議。建築計画教室の大幅な改造案を主任と作り始める。

一月二四日

朝世田谷村の二階に光が溢れ返っている。ひろしまハウス建設募金の具体策を作り始めたが、これは幻影そのものが実現し始め

るといふ類の計画案だから、その幻影そのものを主役に据えた方が良いだろう。昔、学生^{ガキ}だった頃二年生の設計実習で「現代の寺」といふ課題が出された。出題者は渡辺保忠先生であった。私の気持ちの中ではあの課題への答えをまだ探しているのだろう。渡辺保忠先生の感性をベースにした論理の構築力は一級品だったな。私の何処かにあの力が継承されていれば良いのだが、思い込みの強さだけだなき継いでいるのは。九時地下打合わせ。午前中で終る。十四時地下学生ゼミ。柴原の成長が目につく。十八時安藤修計見る。速力が全く無い。何してんだとイライラするが、マこんな事にエネルギー使っても仕方ネエやと懨然とするばかり。しかし、今日は程々の収穫があった。明日もしっかりやろう。何故か眠れず。

一月二五日

夜半の二時。眠れぬままに起き出して、何やらゴソゴソやっている。東大の伊藤毅先生から「都市の空間史」送っていただいた。序を読んだだけであるが、ゆっくり時間をかけて読むべき本のようだ。さて、眠る努力をしようか。十時過建築学会教育委員会シンポジウムで二〇分の講演。十二時大学。十三時野村セバスチャンミーティング。明治通りコンバージョン、北九州。十四時設計製
図公開講習会。

一月二六日

王国社からの私の新しい本のゲラ最終チェック。アルクルの勝ちちゃんからカレンダーを送ってきていて、今日初めて開けてみたのだが、良いもので使おう。アルクルにもしばらく行ってないな。GAより日本の現代建築を考えるII送られてくる。

十六時過約束通り六車護佐藤論佐藤道子来世田谷村。歩いて栄寿司へ。佐藤健をしのんで飲み、かつ喰う。二二時私は帰ったが六車、論、雄大はその後朝三時頃までやったらしい。それで良い。大いにやれ。

佐藤健の奥さん道子さんより、健の遺品の中から沢山、石が出てきたので千村君へ差し上げてくれといただいた。これは直接千村君へ手渡さねばならぬだろう。千村君はこの石をどうするのか。

一月二七日

九時スケジュールミーティング。